

## No.48 牛波／ニューポ 「標的の裏側」

Niu Bo

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 2 月 15 日付 立川市市報記事より

牛波は中国出身のアーティストで、その活動の幅は広くダイナミックだ。飛行機を飛ばして、その雲で空に絵を描く大空絵画。ジェット機を超高速で飛ばし、その機内にできる無重力状態の中で作品制作をする無重力絵画などは、美術の可能性を拡げてきた。自由の女神像のたいまつから伸びた飛行機雲はニューヨーク子の評判になった。

立川の換気塔の両面に面白いことを考えた。ともに 20 世紀美術の代表作のパロディである。ジャスパー・ジョーンズの「標的」には実弾で穴を開け、フォンタナの「切り裂かれたキャンバス」を縫い直した。町中のアートとしては秀逸で美しい作品になっている。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

『標的』というマークは人間が考え出し、もともと真ん中を射つような形にしていたものである。人類最初の概念はそれだった。

そのコンセプトをジャスパー・ジョーンズはある意味で無くしたが、最初の概念はまだ死んではいず、目覚めている。

だから「射ってくれ射ってくれ！」という声が私の耳に聞こえてくるわけなのだ。

人類最初の概念を見えなくすることは美術の分野の特徴のひとつである。

「美術」の型がそのコンセプトを片付けてしまう事が、現代美術の閉塞状態の一つのきっかけとなったと私は思っている。いわば歴史的な空間と視点でこれを見えなくしてしまったのだ。厳密に言うと一枚の紙を射た弾孔の表側と裏側、それを境界とする—入口と出口—は同じ方向、大きさ、形ではないのである。

フォンタナが画布(カンバス)を切り裂いたことが一つ平面の世界を三次元に洞開させた。

しかし、これ以外の世界を閉じてしまったとも私は感じる。

その切り裂かれたカンバスを縫い合わせることによって、可能性の原点に戻ることができると思うのである。

重要なのは 0 (零) に戻ることに—この 20 世紀美術の一つの方向性と仕事とが一緒となり、このような 0、あるいは最初の概念に戻る回数の増加によっては 0 という場所は立体的な輻射状態となるであろう。

可能性の無いところでの可能性が有る状態となり得るのだ。

標的は街に戻り、さらには丸い球形の標的になれば、四方八方から射つ事も可能となる。

こちらから射つ弾孔は向こう側から出て行き出口はもう一つの座標にもなる。

例えばブラックホールのように幾つかの宇宙の間の弾道でつながるように。

我々は唯一つの面しか射っていない・・・

我々はまだ射中していない・・・

何を射っていたかもしまだはっきりとせず・・・

今回の私の2つの作品のいいたいことはそれである。

あるいは意識的な視点から未だはっきり見る事が出来ない別の標的を捜し、標的中の標的を射中しようとしているのだ。

これらの試みには、前衛芸術の再解釈を重複するのではなく、またコンセプト氾濫の「伝統」に参加するのでもなく、その「伝統」を無効化とすると共に、その病理を根絶することによる美術の新しい方向性を再設定しようとする意志。

それがコンセプトである。